

監修 野間宏・久保田正文

労働者文学 作品集(I)

労働者文学会議 編

監修 野間宏・久保田正文

労働者文学 作品集(I)

日本社会党機関紙局

労働者文学作品集(I)

一九八〇年十二月一日 第一刷発行

定価一八〇〇円

監修

野間 宏・久保田 正文

編者

労働者文学会議

発行

日本社会党中央本部機関紙局

東京都千代田区永田町一―八―一

振替東京 五―六八七七六

電話東京 03 (五八〇) 一一七一

制作

株式会社 北 泉 社

印刷

株式会社 光 洋 社

序

一九八〇年、戦後三十五年の今日、日本の戦後文学創造を見とどける中で、労働者文学のその中における位置測定を行ない、そのすぐれた作品群を集め、その積極的な評価と、きびしい批判を行なうことによって、新しいここ三、四年の間に生まれつつづけている労働者文学のこれまでにない昂揚を背にして、既成の文学水準、その感性、論理、創造力、比喩、暗喩、構成力の大きな転換をはかろうとする意図を、私の身近な文学の問題として感じとり、そこに大きな期待を持つものである。

文学・芸術は、時代のもっとも重要な問題に直面し、それを問いつめると同時に、時代を超えるところに、その真の創造力を発揮するものである。一つ一つの職場の身近な問題、それに向かうにあたっても、その問題がどのように、日本の全土にひろがっている他のさまざまな問題と、いかに結合しているか、これを引き出し、そのただ中に、作家の眼は置かれなければならないのである。

一九八〇年という年代は、けっしてよく言われるような一九三〇年代と同じ時代だと思えることはできない。

核戦争、エネルギー問題、巨大な工業化による環境破壊や汚染の問題、異常気象による農産物、海産物、食糧その他の問題、巨大な姿をあらわした第三世界の人たちといかに結合するかの問題、第三次産業の労働者の問題をも含めて、これらの問題のなかで、一九八〇年代から、世紀末、二十一世紀へかけての長期の展望

をもつて、労働者の労働もまた捉えられなければならない。労働者の労働の質そのものも、急激に変わりつつある。

技術革新は、確かに以前のように、急速な展開を示してはいないとはいえ、原子力発電所、遺伝子工学、マイクロコンピュータを中心とする諸工業の推進の中で、新たな大きな技術革新が行なわれようとしていく。人間の意識そのものをも、神経系統をいじることによって変えてしまふ、そういう考えさえ、生まれてきているのである。また、労働者に代えるにロボットをもつてしようとする考えの進行する時代はそれほど遠くはない。そして労働者の精神の機械化は、あらゆる機会と機関を通じて進められるに違いない。

私は、ここに生まれた労働者文学会議の活動方針が、実によく整理され、非常に重要であると考えている。しかし、それだけではなく、各自の職場、工場その全国的なつながりの中に生まれている、あらゆる矛盾、問題に鋭い眼を向けるとともに、その背後に、このような大きな問題が横たわっていることを、絶えず討議にのぼし、これはけつしてただ単に、労働者だけの問題ではなく、住民、農民、漁民、中小企業者、主婦、学生、インテリゲンチヤその他全国民の上に置かれた問題であることを深く考え、その先頭に立って、文学・芸術の自らの創造力の根底そのものを、絶えずみつめながら、その巨大な創造活動を進めてもらいたいと考える。

一九八〇年十一月

野 間 宏

劳动者文学作品集
(I)
||
目
次

序——野間 宏

非行少年——野呂重雄……………3

泥だらけの記——畑中康雄……………17

特別二等寝台車——藤森司郎……………44

行賞規程第六條——谷 恭介……………65

ファンキー・ジャズ デモ——小関智弘……………96

片隅の砦——原田 寛……………103

彼——山田昭彦……………111

吃音集団——小寺和平……………118

奇妙な合金——芳川幸造……………140

パセティックな一日——清水克二……………165

明治百年の労働者——神田貞三……………180

境界にて——林 健……………188

競合脱線——はらてつし……………210

半 職 制——武居孝男……………226

フィニッシュ・フラッグ——橋本雄介……………244

【解説】戦後に挑む

労働者作家たちの確かな眼——小田美智男……………277

労働者文学作品集
(I)

非行少年

野呂重雄

ぼくと嘉奈子は職員室の青いガスのもえるストーブの前に坐らされて、周囲を教師達に囲まれて口々に罵られていた。するどい言葉がぼくらの柔らかい桃色の耳朶をひき裂くようにふりそそいでくるのを、ぼくらは眉をさげてきいていたがそれは、ぼくらが彼らを侮蔑していて、ただ一刻も早く彼らの監禁から逃れねばならないと考えていたからである。「そんなことじゃあ、君は卒業できなくなるぞ」と言ったのは担任の安藤であり、「色気づきやがって……」と口走ったのは体育の犬丸だった。

背の低い四角い顔の校長が左右に頭をふって大股にやってくる。安藤はバネ仕掛のように立ち上がって席を譲り、「いつも問題ばかりおこして申しわけありません」と言って頭をさげ、ぼくらが寝とまりして歩いたことをまるで犬の交尾のことのように話すのだが、そして醜惡に語れば語

るほど自分達が清潔であるような錯覚をおこすらしい。安藤はいかに彼がぼくと嘉奈子のことと奔走したかをうまいぐあいに校長に告げ、ひるがえってぼくらの方に強いレンズで拡大された眼をむけて、君たちのことでこの頃は夜もろくろく眠れないでいるんだと話すのだが、それをきくとぼくの背中にはむずがゆくなってきた。胸のあたりに火がまわりだして何かわあわあ喚きたくなるのだ。「担任の先生がそれほど心配してくれているのに、お前は少しも改心する気がないのか」と校長は唖れ声で言うのだが、なぜ彼の声はかすれているのか、それが酒のせいだということもぼくは知っている。十三間通りの春日酒店の信吉の話によれば三日に一度は酒やビールが校長室でひらかれる会議にはこぼれているのだし、ここにいるこの教師達も生徒に売りつける参考書一冊から二割のリベートをピンハネしてその積

みたてで旅行をやり芸者をあげ、酒を飲みながらぼくや嘉奈子や信吉ら非行少年の対策を話しあうのである。高校二年のぼくらのクラスの中には学校に出入りする業者の息子や親戚の者が幾人かいるし、彼らはそのリベートを調べて教師の裏面を暴露し権威をひきずりおろすことに熱情をかんじているのだが、ぼくにしても安藤がレンズの奥のガラスのような眼をうるませてぼくの将来を思つて夜もろくろく眠れぬなどというのをきくとますます彼らがいやらしいと思わざるをえない。

嘉奈子の担任の頬骨のたかいオールドミスの上際さきは、嘉奈子をさすように言つた。

「あんた、このひとが将来あんたと夫婦になるつもりで、真面目につき合っていると思つているの?」

嘉奈子はすいと顔をあげて言つた。

「私だつて、このひとが真面目でないの知つてゐるわよ。でもさ、先生、このひとハンサムだからいいじゃないの。

先生も遊んでごらんよ、面白いから……」

「なにを言うか!」嘉奈子の頬がなり一瞬憤怒が教師達をとらえたかにみえたが、もともと彼らに怒りがあるわけがない。そんな高級な感情を維持するには彼らの精神は散漫でありすぎ、彼らのそれは弱点を生徒に衝かれた教師の面子の混乱でしかない。ぼくらはまる二時間も彼らに囲まれて訓示され改心をせまられ、以後氣をつけるといふ誓約をせまられ、それを拒否してふらふらになつて釈放された

のだった。

真向かいから木枯らしの吹きつける校門の外にでながらぼくは毎度のことさと思つてみたが、セーラー服の脇のホックのはずれているのも気づかず歩いてゐる嘉奈子の横顔にはさすがに疲れがみえた。のほほんとしてチュウインガムを噛んでゐるが、彼女がそうであればあるほど、ぼくは嘉奈子の内心の傷痕に触れてみたくなる。それでつい言つてしまふ。

「もうあんな学校なんか行つてもしょうがないな。君もやめろよ」

すると嘉奈子はその眼に皮肉な光りをつけ頭髮を後ろになげるように仰向いて言うのだ。

「そういう言い方、ちと生意氣ね。おかみさんあつかいは早すぎるわよ。それになんでしょ、卒業しなくちゃ、いいと就職できないでしょうが。あんたみたいなお坊ちゃんには分からない苦労が、こちらにはありますのよ」

こういう言い方にはぼくは馴れているのでぼくは笑つてみせるが、しかし、ひそかにぼくの胸を向こうにおしやる嘉奈子の冷たい手をその言葉の中にききとることができ

る。ぼくらは長い灰色のペンキ工場の塀のはずれに立つて、夕陽がガスタンクに赤く反射するのを眺めてから無言で別れた。ぼくは嘉奈子の薄い肩のあたりを見おくりながら、今日の放課後のバイトを棒にふつた彼女と彼女の弟の夕食

がどんなものかと想像して、胸のしめつけられる思いがするのだった。

駅前のパン屋の店先に嘉奈子は店員の白い服を着て立って、ぼくが駅の階段をおりてくるのをいつものとらえようのない微笑をただよわせながらみている。ぼくは何くわぬ顔で近づき百円札をだして四十円のパンを下さいと言うと彼女は、はいどうもありがとうございましたと四十円のパンを袋にいれて百円銀貨四枚の釣をぼくの掌にいれる。ぼくはそれでタマゴとミカンを買って彼女の借りている部屋のある路地にはいっていく。ギブスをはめて低い天井をみている広志は、土色の唇をゆるめてぼくにほほえむ。姉のどことなく冷たい笑いとはちがう子供の素直な微笑だ。広志の夢はいつか力いっぱい野原をかけめぐることだが、それが生涯彼にはありえないことだといつかぼくは彼に話してきかせなくてはならない。それをぼくはまるで希望を語るように話せたらと思うのだが嘉奈子は一笑にふする。

「広志、今日は目玉焼か、それとも甘く焼こうか」

とぼくが言うと、姉に似て陰のある瞳が気弱に光ってどちらでもないと言う。ぼくは目玉焼をつくってそれを彼女の女の子のような形のいい唇におしこみながら、ぼくもパンをかじって昨日の詰将棋や昨夜のラジオの「帝国海軍の最期」について話しかけるのだが、相撲の大鵬が負けたといつて何日も口惜しがる彼に、ぼくは人間というものは敗れることに馴れなくてはいけないんだよ、と口を酸っぱくして

いうのだ。そのうちに広志は疲れて瞳孔がとろんとしてしまい眼の縁が濃くしずんでくるので、ぼくは待ちくたびれたようにこの陽のささぬじめじめして冷たい部屋から外にとびだすのだが、そんな時だ、ぼくがこの姉弟にかかわりあっているのが少し忌々しくなるのは、だが彼らとの関係をたちきけることはぼくにはいつでも出来るのだと思ひこむことでぼくはこの不安をはらいのける。広志はぼくのことを親切で勇敢なお兄さんと考えているらしいがぼくのこの忌々しさを知ったら、どんなに絶望するだろう。だが嘉奈子のぼくに対する態度がなにかぼくにもどかしさを与えるからといって、そのことでその弟に当たり散らすことはあの犬丸や安藤やセンセイたちのやることであって、ぼくのやることではない。ぼくは一年前まではくだらぬ思索の中で無限に堂々めぐりしていたが、今では直観的に感情に折り目をいれることが好きになってきている。

街角で草色のセーターと長いショールを首にまいた嘉奈子が信吉と話しているのを、ぼくは電話ボックスにもたれて眺めていた。信吉とどんな話があったにしても嘉奈子は目下のところぼくと寝ているのだし、それは確かなことの見分けがたい人間関係の中で、一つの判断のてがかりになるはずだ。ぼくはほんの少しじりじりしながら彼女を待ったがやがて嘉奈子は信吉から何かうけとって、こちらに向けて歩きだした。近づいてきた嘉奈子は熱があるのか頬を赤くし、黒く大きい眼がうるんだようにひかって、その

鼻すじの冷たい線がときどきぼくに寄りつきがたい賛嘆の念を与える。けれどもぼくは彼女の胸がもう少し固くなるには肥えねばならないのだと考えている。

「金少し残ってない？」

ときくのでぼくはジャンパーのポケットの中に手を入れ、切れたボタンや鍵や文庫本の間をさぐって百円玉を一つとりだし、彼女の湿った掌にいれると彼女は睫をおとしてそれを見つめている。ああこの恰好はさっきの信吉と嘉奈子のそれと同じだと気づいたものの、これで一食分はあると考えている彼女の眉の間の陰りをみるとぼくはまたも彼女のために金をつくる方法を考えってしまうのだが、それはそれほど困難なことではない。ぼくは陸橋を渡り貨車のぶつかりあう音響のきこえてくるN駅の上の墓地の石に坐って煙草をふかし、機関車区を眺めて日の暮れるのを待っている。遠くどこからかひきずられてきた貨車の列はそこでひととずつ切りはなされてごろごろ走りそれぞれの方向別に分けられていく。その車にぶらさがって旗をふっている若い男はものも言わず飽きもしないでいつまでも同じことをくりかえしているのだが、そんな光景をみているとなるとなく心が落ちついてくるから不思議だ。やがてぼくはぼくらの学校の裏にまわり教室の窓をあけてはいりこみその壁のスピーカーを二つはずして帰ってくる。時々ぼくは街で繁盛している玩具屋みたいな新刊書店の棚から辞書やベストセラーを失敬してカバンにいれ、隣り街の古本屋

へもっていくのだがつくろうと思えば金は簡単にできるのだった。それは雨がふれば濡ればいいさというようなものであるがそれをやる度に心におこる緊張はぼくをしますます孤立させ、ぼくを強くし、ぼくの世間への侮蔑を深めることになる。ぼくは陸橋の上からブラットホームに降り立つサラリーマン達の疲れた顔や学校のセンセイ達のことを考えると、世間の果ての赤錆びた鉄骨ばかりの廃墟の街にひとりほうりだされた時のような頭痛と切迫した寂寥感に息がつまる思いがする。だから時にぼくに思ひだしたように金をくれるK県では金融業者として評判のよくない父親も、E小学校PTA会長の母親もぼくのまさにぼくであるところのものを愛することができず、或いはせめて息子の中には親には理解できない見所があるのだと夢想する親馬鹿さえもちえず、ただ小さな町で行状の悪い息子のために警察につけ狙われるのをおそれて叔父のいる東京にぼくを追放し、やれやれと胸をなでおろしているしまつだからぼくの方でも、彼らの虚栄や打算をおびやかして出来るだけ金をせしめようという魂胆になる。それに父は妾宅の色白の長男の方がぼくより出来がいいので彼を代わりに入籍させたいと考えているらしいから、いざればぼくは一族全体の名折れとして爪はじきされ忘れられるにちがいない。

スピーカーの校名をシンナーでおとしてからぼくはそれを浅草の古道具屋へもっていき顔なじみの禿の親爺からいつもより一枚百円玉をはずんでもらい、それで名物おいら

ん焼を買って再び嘉奈子の家にくる。嘉奈子は寝てしまった弟の傍で腹ばいになって薄暗い裸電燈をさげて「美しき十代」という雑誌をひらき、八女の秘密Vというところを読んでいる。そういえば嘉奈子にはなにかしら神秘的なところがあるとおぼくは思いながら、持ってきたおいらん焼をどさりと下におとし金を畳に投げると、嘉奈子の眼が笑い八重歯がでておぼくを可愛がるように「話せるなあ」と言う。おぼくと彼女は接吻しそれから彼女につき離されるまで彼女のタオル地の色のさめた花模様の寝巻の下に手をいれようとするが彼女は笑って身をはなす。

「男って、いつも下心があつて親切にするのね」

おぼくは自分はそのうではないということを言いたかったがそれをどのように伝えるか考えているうちに沈黙している方が具合がいいのに気づくのだ。下心といったところで彼女の体を知っているおぼくにこれ以上どんな下心があるというのだろう。あるとすれば嘉奈子の誰にもみせない心のうちに重なりたいというのぞみがあるばかりだ。おぼくはその事を言いたかったがそれは表現したとたんに意味がなくなってしまうのでやはり沈黙していなければならなかった。

おぼくはもう一度嘉奈子の胸をつよく押しつけて動かしてから立ち上がり外に出ていった。嘉奈子は意外そうに外までついてきて街燈の下でちよつと濡れたような寂しい顔をしてから、「かえるの? じゃ、ばいばい」と肩の下で手を動かしてくるりと後ろに向いたがその時彼女のほそい頬

あたりにうかぶ寂しく優しい表情をおぼくは勝ち誇つたように見逃さなかった。

翌朝校長はおぼくらを校庭に集め気をつけの姿勢をとらせてから例の小さい体の中から、鍋底をひっかくような唖れた声で、

「昨日美智子妃殿下にシンノーがお生まれになりました……」と言った。誰かがシンノーってなんだい、と言うと誰かが赤ちゃんのことだよと言ひ嘉奈子の隣の女の子が、「赤ん坊ならあたしだって……」と言ったので、くすくすという笑いが後列の女子の間にひろがるのをおぼくはきいていた。校長が「……おかせられました……」と言うと信吉は「くだらねえ」と肩をそびやかして片足を前にだし、ギターをひく手つきで体をふるわせぶぶん唇をならして隣のクラスの色白の女の子に片目をつぶつてウィンクした。校長が「日本が戦前のように皇室を中心にして立派に復興したのはなんとしても嬉しいかぎり、両陛下もどんなにお喜びでしょう」と言うと言ひ信吉は色白の女の子の尻に手をのばしてさわって、「そうです。とってもお喜びです」と言つたが校長は続けて、「近頃はバンザイというものをおあまりしなくなったが、今日はバンザイを高らかに三唱したい」と言うと言ひ信吉はちよつと大声で、「ぎょ、ぎょ」と言った。校長は思いきり深呼吸して上空を睨みふりしほつた唖れ声で、「シンノー、ゴタンジョー、バンザー

「イ」と叫んだが、かろうじて手をあげたのは教師と前列の生徒くらいで、あとは照れて笑ひ後列の信吉たちはこの時とばかりにハッハと笑った。校長は動転して色を失ひ、途方にくれて台上で眼をしばたき、はるかな宮廷の人々にたいする申しわけなさで胸をつまらせ蒼ざめ立ちすくんでいたがやがて我をとりもどし、「笑ってはいけない！」と一喝したがその時はもう誰も笑ってはいなかったのでまた皆笑いだした。なんという憎たらしいやつらだろうという顔で校長が台を降りようとした時ひとときわ高く指笛がなり響いたがそれは信吉のやったことだった。忠犬ハチ公というあだ名の犬丸が台にとび上がって、「誰だ！」と叫んで背のびして睨みつけたが視線はぼくの方に向いてとまったので、これはやられると感じたが案の定、一時限が終わるとぼくは担任の安藤によびだされて宿直室に入れられた。

「指笛はおれじゃないよ」というと忠犬ハチ公は蟹のように股をひらき、つきでた腹の上に腕組みして、「お前のやったことさ、お前でなくて誰がやるんだ」と言うのだった。ぼくはそっぽを向いてどうして他にもやりそうな奴はたくさんいるのにおればかり狙いやがるのかと思ったがハチ公は、「おまえは知能犯だからな」とぬかす。なおも頑固に黙っていると短気なハチ公は柔道で鍛えた太い腕をのぼしぼくをなぐりつけるのだが、ぼくはなぐられるということはどうしてこうもひどい屈辱になるものかと訝しがりながら湧き上がる熱いものを抑えつけて、それを太い金属の

柱に固めて胸の底にうちこんだ。校長はいつの間にか後ろに立っていて、「こういう生徒がいるから一般の生徒も生意気になるんだ。君みたいな生徒が学校の物をもちだすんだらう。スピーカーをもちだしたのも君だらう、どうだ」と言うのでぼくは窓から外の高圧線を見上げてうすく笑った。「なんだその笑い方は。校長先生の前でなんだ！」とハチ公は大声をあげるのでぼくは、ははあここが忠犬の忠犬たるどころだなあと思った。上の者におべんちゃらのうまいことの教師達のことは近隣でも有名らしく、学校の塀の下を通りすぎる他校の教師のデモ隊にいつも野次られっぱなしなのだ。ぼくは校長らに言うべきことをたくさんもっていたがハチ公の腕力を知っていたから黙ることにした。ハチ公はなおも矛先をスピーカーに向けて追及してきただがぼくは血のにじむ唇をなめながらむかむかする心をおさえつけていたのである。

屋近く彼らはぼくを宿直室から釈放したが安藤が職員室に來いというのでついていくと、教師達はいっせいにぼくの方を見て、「また何かやったのか」「どうも女をおぼえとふてくされてしょうがない」などと言ひあうのだ。安藤は職員室の隅の衝立の陰にぼくをいれ、赤いふくらんだ唇をなめ声を低めてぼくにもっとこちに寄れと言ひのぼくは彼のズボンに触れるぐらいい近くに坐らされた。彼は女のように白く太り、ぼくの膝をはさむ彼の太腿は嘉奈子のそれより弾力があって気味がわるかったが彼はそのよう

に近くに坐らせることでほくに親近の感を与え教育効果をつよめようと考えているらしいのだ。

「どうして指を鳴らしたの」と彼はやさしく小さな声で訊いてくるので、ぼくは「おかしいからしょうがないですよ。バンザイなんて、運動会じゃあるまいし……」と言うと、安藤はよく分かるというふうに頷いて、「……バンザイなんて誰だって腹の中では苦々しく思っているんだ。ましてぼくは戦争中何回も天皇陛下バンザイして先輩が死んでいくのを見てきたから、本気にバンザイなんかできやしないんだよ。でもさ、この学校は特別そういう学校なんだ。ここだけの話だけどさ、要するに、ほら、犬丸先生や校長が相当なもんなんだよ。なあ、分かるだろう。だからさ、いいかげんに妥協しながらやるんだ。いつかは少しはましな学校になるさ、でも君、やっぱり指を鳴らすなんてまずいよ。いくらなんでも、そうだろう。だからこのところは、君が折れていくべきなんだ。君だってもう少しで卒業じゃないか。ここで退学にでもなったら大損じゃないか。そうだろう、ええ、そうだろう」

ぼくは言った。ぼくは指笛なんて吹いたおぼえはないし、それに退学にされたっていいのだ。すると安藤はその厚いレンズをひからしてぼくを睨み、「君はこれほど君のことを心配している。ぼくの気持ちに分らないのか。生徒のことをこんなに考えている教師がほかにいると思うのか！」と唇をひきつらして言うのだ。ぼくはまたしてもこれ

だと思つてげんなりしてしまふのだった。

夕方、ぼくと信吉は嘉奈子と連れだってインク工場の臭気のただよう路地を歩いていった。嘉奈子は安いガムを噛みながらぼくの報告を興味のないような顔して聞いていたが、信吉はニヤニヤしながら「ひとつお前に借りができたわけだ。いつか、お前の仕事の手伝いをするよ」と言った。それでは今夜校庭の隅の終の下に来てくれといつてぼくらは別れた。予定の十時半になると彼はスキー帽をかぶり革のジャンパーを着てきた。ぼくらは体育小屋のガラス戸をやぶつて中にはいり、運動会用の鉄杭を数十本盗みだしそれを菰でくるんでぼくの部屋窓の下まで運んだ。

信吉とぼくは一つの蒲団にもぐりこんで寝ることになったが信吉も昂奮して眠れないのだ。ぼくが「おい、あれを売った金は三等分するんだぞ」と言うと言吉は頭をあげて、「誰にやるんだ」と言った。嘉奈子にやるんだと言うと言吉はニヤリと笑つて、「惚れているのか」と言うので、ぼくは好きは好きだが深刻なものじゃないよと言つた。汗臭くねばねばした彼の皮膚の匂いがぼくの鼻について眠れないままに手をのばして深夜放送をいれると、またも信吉は眼をさまし充血した鬼のような眼をこちらに向けてまだ起きていたのかと言う。ぼくはいつもこうだよと弁解めいたことを言つて心の不安をおしかくした。彼は天井を見上げながら彼にしては珍しくしんみりした調子で、